

傳道之書

第一章一ダビデの子エルサレムの王傳道者の言二傳道者言く  
 空の空の空なる哉都て空なり三日の下に人の勞して爲とこ  
 ろの諸の動作はその身に何の益かあらん四世は去り世は來る地  
 は永久に長存なり五日は出で日は入りまたその出し處に喘ぎ  
 ゆくなり六風は南に行き又轉りて北にむかひ旋轉に旋りて行き  
 風復その旋轉の處にかへる。七河はみな海に流れ入る海は盈る  
 こと無し河はその出きたれる處に復還りゆくなり八萬の物は  
 勞苦す人これを言つくすことあたはず目は見に飽ことなく耳  
 は聞に充ること無し九曩に有し者はまた後にあるべし曩に成し  
 事はまた後に成べし日の下には新しき者あらざるなり一〇見よ  
 是は新しき者なりと指て言べき物あるや其は我等の前にあり  
 し世々に既に久しくありたる者なり一己前のもの事はこれ  
 を記憶ることなし以後のもの事もまた後に出る者これをお  
 ぼゆることあらじ二われ傳道者はエルサレムにありてイスラ  
 エルの王たりき三我心を盡し智慧をもちひて天が下に行はる  
 る諸の事を尋ねかつ考覈たり此苦しき事件は神が世の人にさづ  
 けて之に身を勞せしめたまふ者なり一四我日の下に作ところの  
 諸の行爲を見たり嗚呼皆空にして風を捕ふるがごとし一五曲れ  
 る者は直からしむるあたはず缺たる者は數をあはするあたはず  
 一六我心の中に語りて言ふ嗚呼我は大なる者となれり我より

先にエルサレムにをりしすべての者よりも我は多くの智慧を得  
 たり我心は智慧と知識を多く得たり一七我心を盡して智慧を  
 知んとし狂妄と愚癡を知んとしたりしが是も亦風を捕ふるが  
 ごとくなるを睨れり一八夫智慧多ければ憤激多し知識を増す者  
 は憂患を増す

第二章一我わが心に言けらく來れ我試みに汝をよるこばせん  
 とす汝逸樂をきはめよと嗚呼是もまた空なりき二我笑を論ふ  
 是は狂なり快樂を論ふは何の爲とところあらんやと三我心に  
 智慧を懷きて居つつ酒をもて肉身を肥さんと試みたり又世の  
 人は天が下において生涯如何なる事をなさば善らんかを知ん  
 ために我は愚なる事を行ふことをせり四我は大なる事業をなせ  
 り我はわが爲に家を建て葡萄園を設け五園をつくり園をつくり  
 又菓のなる諸の樹を其處に植ゑ六また水の塘池をつくりて樹木  
 の生茂れる林に其より水を灌がしめたり七我は僕婢を買得た  
 りまた家の子あり我はまた凡て我より前にエルサレムにをり  
 し者よりも衆多の牛羊を有り八我は金銀を積み王等と國々の  
 財寶を積あげたりまた歌詠之男女を得世の人の樂なる妻妾  
 を多くえたり九斯我は大なる者となり我より前にエルサレムに  
 をりし諸の人よりも大になりぬ吾智慧もまたわが身を離れざ  
 りき一〇凡そわが目の好む者は我これを禁ぜず凡そわが心の悦  
 ぶ者は我これを禁ぜざりき 即ち我はわが諸の勞苦によりて  
 快樂を得たり是は我が諸の勞苦によりて得たるところの分な

二 我わが手にて爲たる諸の事業および我が勞して事を爲た  
 る勞苦を顧みるに皆空にして風を捕ふるが如くなりき日の下  
 には益となる者あらざるなり 三 我また身を轉らして智慧と  
 狂妄と愚癡とを觀たり 抑王に嗣ぐところの人は如何なる事  
 を爲するや その既になせしところの事に過ぎるべし 三 光明の  
 黑暗中にまざるがごとく智慧は愚癡に勝るなり 我これを曉れり 一  
 四 智者の目はその頭にあり 愚者は黑暗中に歩む然ど我しる其みな  
 遇ふところの事は同一なり 五 我心に謂けらく 愚者の遇ふとこ  
 ろの事に我もまた遇ふべければ 我なんぞ智慧のまさる所あら  
 んや 我また心に謂り是も亦空なるのみと 六 夫智者も愚者と均  
 しく永く世に記念らるることなし 來らん世にいたれば皆早く  
 既に忘らるるなり 嗚呼智者の愚者とおなじく死るは是如何な  
 る事ぞや 一七 是に於て我世にながらぶることを厭へり 凡そ日の  
 下に爲ところの事は我に惡く見ればなり 即ち皆空にして風を  
 捕ふるがごとし 一八 我は日の下にわが勞して諸の動作をなした  
 るを恨む其は我の後を嗣ぐ人にこれを遺さざるを得ざればなり  
 一 九 其人の智慧は誰かこれを知らん然るにその人は日の下に我  
 が勞して爲し智慧をこめて爲たる諸の仕事を管理するにいたらん  
 はまた空なり 二〇 我身をめぐらし日の下にわが勞して爲たる諸  
 の動作のために望を失へり 二 今茲に人あり 智慧と知識と才能  
 をもて勞して事をなさんに終には之がために勞せざる人に一切  
 を遺してその所有となさしめざるを得ざるなり 是また空にし

て大に惡し 三 夫人はその日の下に勞して爲ところの諸の動作  
 とその心勞によりて何の得ところ有るや 三 その世にある日に  
 は常に憂患あり その勞苦は苦し その心は夜の間も安んずるこ  
 とあらず 是また空なり 二 四 人の食飲をなしその勞苦によりて心  
 を樂しましむるは幸福なる事にあらず 是もまた神の手より出  
 るなり 我これを見るに 五 誰かその食ふところその歡樂を極むる  
 ところに於て我にまさる者あらん 二 六 神はその心に適ふ人には  
 智慧と知識と喜樂を賜ふ 然れども罪を犯す人には勞苦を賜ひ  
 て斂めかつ積ことを爲さしむ 是は其を神の心に適ふ人に與へ  
 たまはんためなり 是もまた空にして風を捕ふるがごとし  
 第三章 一 天が下の萬の事には期あり 萬の事務には時あり 二 生  
 るるに時あり 死るに時あり 植るに時あり 植たる者を抜に時あ  
 り 三 殺すに時あり 醫すに時あり 毀つに時あり 建るに時あり 泣  
 くに時あり 笑ふに時あり 悲むに時あり 躍るに時あり 五 石を擲つ  
 くに時あり 石を斂むるに時あり 懐くに時あり 懐くことをせざる  
 に時あり 六 得に時あり 失ふに時あり 保つに時あり 棄るに時あり  
 七 裂に時あり 縫に時あり 黙すに時あり 語るに時あり 八 愛しむ  
 に時あり 惡むに時あり 戰ふに時あり 和ぐに時あり 九 働く者は  
 その勞して爲ところよりして何の益を得んや 一〇 我神が世の人  
 にさづけて身をこれに勞せしめたまふところの事件を視たり 二  
 神の爲したまふところは皆その時に適ひて美麗しかり 神はま  
 た人の心に永遠をおもふの思念を賦けたまへり 然ば人は神の

なしたまふ作爲を始より終まで知明むることを得ざるなり二  
 我知る人の中にはその世にある時に快樂をなし善をおこなふよ  
 り外に善事はあらず三 また人はみな食飲をなしその勞苦によ  
 りて逸樂を得べきなり是すなはち神の賜物たり四 我知る凡て  
 神のなしたまふ事は限なく存せん 是は加ふべき所なく是は減  
 すべきところ無し 神の之をなしたまふは人をしてその前に畏  
 れしめんがためなり五 昔ありたる者は今もあり後にあらん者  
 は既にありし者なり 神はその遂やられし者を索めたまふ六 我  
 また日の下を見るに審判をおこなふ所に邪曲なる事あり 公義  
 を行ふところに邪曲なる事あり七 我すなはち心に謂けらく神  
 は義者と惡者とを鞠きたまはん 彼處において萬の事と萬の  
 所爲に時あるなり八 我また心に謂けらく是事あるは是世の人  
 のためなり 即ち神は斯世の人を檢して之にその獸のごとな  
 ることを自ら曉らしめ給ふなり九 世の人に臨むところの事は  
 また獸にも臨むこの二者に臨むところの事は同一にして是も  
 死ば彼も死るなり 皆同一の呼吸に依れり人は獸にまさる所な  
 し皆空なり二〇 皆一の所に往く 皆塵より出で皆塵にかへるなり  
 三 誰か人の魂の上に昇り 獸の魂の地にくだることを知ん三 然  
 ば人はその動作によりて逸樂をなすに如はなし 是その分なれ  
 ばなり 我これを見るその身の後の事は誰かこれを携へゆきて  
 見さしむる者あらんや

第四章 茲に我身を轉して日の下に行はるる諸の慮遇を視たり

嗚呼 虐げらる者の涙ながる 之を慰むる者あらざるなり また虐  
 ぐる者の手には權力あり 彼等はこれを慰むる者あらざるなり二  
 我は猶生る生者よりも既に死たる死者をもて幸なりとす三 また  
 この二者よりも幸なるは未だ世にあらざして日の下におこなは  
 るる惡事を見ざる者なり四 我また諸の勞苦と諸の工事の精巧と  
 を觀るに 是は人のたがひに嫉みあひて成せる者たるなり 是も  
 空にして風を捕ふるが如し五 愚なる者は手を束ねてその身の肉  
 を食ふ六 片手に物を盈て平穩にあるは 兩手に物を盈て勞苦て風  
 を捕ふるに愈れり七 我また身をめぐらし日の下に空なる事のあ  
 るを見たり八 茲に人あり只獨にして伴侶もなく子もなく兄弟  
 もなし 然るにその勞苦は都て窮なくの目は富に飽ことなし 彼  
 また言す 嗚呼 我は誰かのために勞するや 何とて 我は心を樂ませざ  
 るやと 是もまた空にして勞力の苦き者なり九 二人は一人に愈る  
 其はその勞苦のため善報を得ればなり二〇 即ちその跌倒る時  
 には一箇の人その伴侶を扶けおこすべし 然ど孤身にして跌倒  
 る者は憐なるかな之を扶けおこす者なきなり二 又二人ともに  
 寝れば温暖なり 一人ならば争で温暖ならんや 二人もしその  
 一人を攻撃ば 二人してこれに當るべし 三 根の繩は容易く斷ざ  
 るなり 三 貧くして賢き童子は 老て愚にして諫を納れざる王に  
 愈る 四 彼は牢獄より出で王となれり 然どその國に生れし時は  
 貧かりき 五 我日の下にあゆむところの群生が 彼王に續てこれ  
 に代りて立ところの童子とともにあるを觀たり 六 民はすべて

際限なしその前にありし者みな然り後にきたる者また彼を悦ばず是も空にして風を捕ふるがごとし

第五章一 汝エホバの室にいたる時にはその足を慎め進みよりて聽聞は愚なる者の犠牲にまさる彼等はその惡をおこひをすることを知ざるなり二 汝神の前にありては軽々し口を開くなかれ心を擗めて妄に言をいだすなかれ其は神は天にいまし汝は地にをればなり然ば汝の言詞を少からしめよ三 夫夢は事の繁多によりて生じ愚なる者の聲は言の衆多によりて識るなり四 汝神に誓願をかなげなば之を還すことを怠るなかれ神は愚なる者を悦びたまはざるなり 汝はそのかけし誓願を還すべし五 誓願をかけてこれを還さざるよりは寧ろ誓願をかけざるは汝に善し六 汝の口をもて汝の身に罪を犯さしむるなかれ亦使者の前に其は過誤なりといふべからず 恐くは神汝の言を怒り汝の手の所爲を滅したまはん七 夫夢多ければ空なる事多し言詞の多きもまた然り 汝エホバを畏め八 汝國の中に貧き者を慮遇る事および公道と公義を枉ることあるを見るもその事あるを怪むなかれ其はその位高き人よりも高き者ありてその人を伺へばなり又其等よりも高き者あるなり九 國の利益は全く是にあり即ち王者が農事に勤むるにあるなり一〇 銀を好む者は銀に飽くと無し豊富ならんことを好む者は得るところ有らず 是また空なり二 貨財増せばこれを食む者も増すなりその所有主は唯目これを見るのみその外に何の益かあらん三 勞する者はその

食ふところは多きも少きも快く睡るなり然れども富者はその貨財の多きがために睡ることを得せず三 我また日の下に患の大なる者あるを見たりすなはち財寶のこれを蓄ふる者の身に害をおよぼすことある是なり四 その財寶はまた災難によりて失落ことあり然ばその人子を擧ることあらんもその手には何物もあることなし五 人は母の胎より出て來りしごとくにまた裸體にして販りゆくべしその勞苦によりて得たる者を毫厘も手にとりて携へゆくことを得ざるなり六 人は全くその來りしごとくにまた去ゆかざるを得ず 是また患の大なる者なり 抑風を追て勞する者何の益をつること有んや七 人は生命の涯黑暗の中に食ふことを爲す また憂愁多かり 疾病身にあり 憤怒あり八 視よ我は斯觀たり人の身にとりて善かつ美なる者は神にたまはるその生命の極 食飲をなし 且その日の下に勞して働ける勞苦によりて得るところの福祿を身に享るの事なり 是その分なればなり九 何人によらず神がこれに富と財を與へてそれに食ことを得せしめ またその分を取りその勞苦によりて快樂を得ることをせさせたまふあればその事は神の賜物たるなり一〇 かかる人はその年齢の日を憶ゆること深からず 其は神これが心の喜ぶところにしたがひて應ることを爲したまへばなり 第六章一 我觀るに日の下に一件の患あり 是は人の間に恒なる者なり二 すなはち神富と財と貴を人にあたへてその心に慕ふ者を一件もこれに缺ることなからしめたまひながらも神またその

人に之を食ふことを得せしめたまはずして他人のこれを食べ  
 ことあり是空なり悪き疾なり三 假令百人の子を擧げまた  
 長壽してその年齢の日多からんも若その心景福に満足せざる  
 か又は葬らるることを得ざるあれば我言ふ流産の子はその人  
 にまさるたり四 夫流産の子はその來ること空しくして黒暗の  
 中に去ゆきその名は黒暗の中にかくるるなり五 又是は日を見る  
 ことなく物を知ることなければ彼よりも安泰なり六 人の壽命千  
 年に倍するとも福祉を蒙れるにはあらず 皆一所に往くにあら  
 ずや七人の勞苦は皆その口のためなりその心はなほも飽ざると  
 ころ有り八 賢者なんぞ愚者に勝るところあらんやまた世人  
 の前に歩行ことを知るところの貧者も何の勝るところ有んや九  
 目に觀る事物は心のさまよひ歩くに愈るなり是また空にして  
 風を捕ふるがごとし一〇 嘗て在し者は久しき前にすでにその名  
 を命られたり 即ち是は人なりと知る 然ば是はかの自己よりも  
 力強き者と爭ふことを得ざるなり一 衆多の言論ありて虚浮き  
 事を増す然ど人に何の益あらんや二人はその虚空き生命の日  
 を影のごとくに送るなり誰かこの世において如何なる事か人  
 のために善き者なるやを知らん誰かその身の後に日の下にあら  
 んところの事を人に告つる者あらんや

第七章一名は美膏に愈り死る日は生るる日に愈る二 哀傷の家  
 に入は宴樂の家に入に愈る 其は一切の人の終かくのごとくな  
 ればなり生る者またこれをその心にとむるあらん三 悲哀は嬉笑

に愈る 其は面に憂色を帶るなれば心も善にむかへばなり四 賢  
 き者の心は哀傷の家にあり 愚なる者の心は喜樂の家にあり五  
 賢き者の勸責を聽は愚なる者の歌詠を聽に愈るなり六 愚なる  
 者の笑は釜の下に焚る荆棘の聲のごとし是また空なり七 賢き人  
 も慮待る事によりて狂するに至るあり賄賂は人の心を壞なふ八  
 事の終はその始よりも善し 容忍心ある者は傲慢心ある者に勝  
 る九 汝氣を急くして怒るなかれ 怒は愚なる者の胸にやどるな  
 り一〇 昔の今にまさるは何故ぞやと汝言なかれ 汝の斯る問を  
 なすは是智慧よりいづる者にあらざるなり一 智慧の上に財産  
 をかぬれば善し 然れば日を見る者等に利益おほかるべし二  
 智慧も身の護庇となり 銀子も身の護庇となる 然ど智慧はまた  
 これを有る者に生命を保しむ 是知識の殊勝たるところなり三  
 汝神の作爲を考ふべし 神の曲たまひし者は誰かこれを直くす  
 ることを得ん四 幸福ある日には樂め 禍患ある日には考へよ 神  
 はこの二者をあひ交錯て降したまふ 是は人をしてその後の事  
 を知ることなからしめんためなり五 我この空の世にありて  
 各様の事を見たり 義人の義をおこなひて亡ぶるあり 惡人の  
 惡をおこなひて長壽あり六 汝 義に過るなかれまた賢に過る  
 なかれ 汝なんぞ身を滅すべけんや七 汝 惡に過るなかれまた  
 愚なる勿れ 汝なんぞ時いたらざるに死べけんや八 汝此を執  
 は善しまた彼にも手を放すなかれ 神を畏む者はこの一切の者  
 の中より逃れ出るなり九 智慧の智者を幫くことは邑の豪雄

者十人にまさるなり二〇正義して善をおこなひ罪を犯すことなき人は世にあることなし二一人の言出す言詞には凡て心をとむる勿れ 恐くは汝の僕の汝を誹ふを聞くともあらん三 汝も人誹ふを誹ふことあるは汝の心に知ところなり三 我智慧をもてこの一切の事を試み我は智者とならんと謂たりしが遠くおよばざるなり二四 事物の理は遠くして甚だ深し 誰かこれを究むることを得ん二五 我は身をめぐらし心をもちて物を知り事を探り智慧と道理を索めんとし又惡の愚たると愚癡の狂妄たるを知んとせり二六 我了れり 婦人のその心羅と網のごとくその手線のごとくなる者は是死よりも苦き者なり 神の悦びたまふ者は之を避ることを得ん罪人は之に執らるべし二七 傳道者言ふ視よ我その數を知んとして一々に算へてつひに此事を了る二八 我なほ尋ねて得ざる者は是なり 我千人の中には一箇の男子を得たれどもその數の中には一箇の女子をも得ざるなり二九 我了れるところは唯是のみ 即ち神は人を正直者に造りたまひしに人衆多の計略を案 出せしなり

第八章 誰か智者に如ん誰か事物の理を解ことを得ん人の智慧はその人の面に光輝あらしむ 又その粗暴面も變改べし二 我言ふ王の命を守るべし既に神をさして誓ひしことあれば然るべきなり三 早まりて王の前を去ることなかれ 惡き事につること勿れ 其は彼は凡てその好むところを爲はなり四 王の言語には權力あり 然ば誰か之に汝何をなすやといふことを得ん五 命令を守

る者は禍患を受けるに至らず 智者の心は時期と判断を知なり六 萬の事務には時あり判断あり是をもて人々大なる禍患をつくるに至るあり七 人は後にあらんとする事を知す また誰か如何なる事のあらんかを之に告る者あらん八 靈魂を掌管て靈魂を留めうる人あらず 人はその死る日には權力あることなし 此戦争に釋放たる者あらず 又罪惡はこれを行ふ者を救ふことを得せざるなり九 我この一切の事を見また日の下におこなはるる諸の事に心を用ひたり時としては此人彼人を治めてこれに害を蒙らしむることあり二〇 我見しに惡人の葬られて安息に在るあり また善をおこなふ者の聖所を離れてその邑に忘らるるに至るあり 是また空なり二 惡き事の報速にきたらざるが故に世人心を專にして惡をおこなふ二 罪を犯す者百次惡をなして猶長命あれども 我知る神を畏みてその前に畏怖をいだく者には幸福あるべし三 但し惡人には幸福あらず またその生命も長からずして影のごとし 其は神の前に畏怖をいだくことなければなり二四 我日の下に空なる事のおこなはるるを見たり 即ち義人にして惡人の遭べき所に遭ふ者あり 惡人にして義人の遭べきところに遭ふ者あり 我謂り是もまた空なり二五 是に於て我喜樂を讃む 其は食飲して樂むよりも好き事は日の下にあざればなり 人の勞して得る物の中是こそはその日の下にて神にたまはる生命の日の間その身に離れざる者なれ 六 茲に我心をつくして智慧を知らんとし世に爲ところの事を究めんとした

り人は夜も晝もその目をとちて眠ることをせざるなり一七 我神の諸の作爲を見しが人は日の下におこなはるところの事を究むるあたはざるなり 人これを究めんと勞するもこれを究むることを得ず 且又智者ありてこれを知ると思ふもこれを究むることあたはざるなり

第九章 我はこの一切の事を用ひてこの一切の事を明めんとせり 即ち義き者と賢き者およびかれらの爲とところは神の手にあるなるを明めんとせり 愛むや惡むやは人これを知ることなし 一切の事はその前にあるなり二 諸の人に臨む所は皆同じ義き者にも惡き者にも善き者にも 淨者にも穢れたる者にも犠牲を献ぐる者にも犠牲を献げぬ者にもその臨むところの事は同一なり 善人も罪人に異ならず 誓をなす者も誓をなすことを畏るる者に異ならず三 諸の人に臨むところの事の同一なるは是日の下におこなはるる事の中の惡き者たり 抑人の心には惡き事充をりその生る間は心に狂妄を懷くあり 後には死者の中に往くなり四 凡活る者の中に列る者は望あり 其は生る犬は死る獅子に愈ればなり五 生者はその死んことを知る 然ど死者は何事をも知らず また應報をつくることも重てあらず その記憶らるる事も遂に忘れらるるに至る六 またその愛も惡も嫉も既に消うせて彼等は日の下におこなはるる事に最早何時までも關係ことあらざるなり七 汝往て喜悅をもて汝のパンを食ひ樂き心をも汝の酒を飲め 其は神久しく汝の行爲を嘉納たまへば

なり八 汝の衣服を常に白からしめよ 汝の頭に膏を絶しむるなかれ九 日の下に汝が賜はるこの汝の空なる生命の日の間 汝その愛する妻とともに喜びて度生せ 汝の空なる生命の日の間しかせよ 是は汝が世にありて受る分汝が日の下に働ける勞苦によりて得る者なり一〇 凡て汝の手に堪へることは力をつくしてこれを爲せ 其は汝の往んところの陰府には工作も計謀も知識も智慧もあることなければなり一 我また身をめぐらして日の下を觀るに迅速者走ることに勝にあらず 強者戰爭に勝にあらず 智慧者食物を獲にあらず 明哲人財貨を得にあらず 知識人恩顧を得にあらず 凡て人に臨むところの事は時ある者偶然なる者なり 二人はまたその時を知らず 魚の禍の網にかかり 鳥の鳥羅にかかるが如くに世の人もまた禍患の時の計らざるに臨むに及びてその禍患にかかるなり三 我日の下には是事を觀て智慧となし 大なる事となせり四 すなはち茲に一箇の小さき邑ありてその中の人は鮮かりしが大なる王これに攻きたりてこれを圍みこれに向ひて大なる雲梯を建たり五 時に邑の中に一人の智慧ある貧しき人ありてその智慧をもて邑を救へり 然るに誰ありてその貧しき人を記念もの無りし一六 是において我言り 智慧は勇力に愈る者なりと 但しかの貧しき人の智慧は藐視られその言詞は聽れざりしなり一七 靜に聽る智者の言は愚者の君長たる者の號呼に愈る一八 智慧は軍の器に勝れり 一人の惡人は許多の善事を壞ふなり

第一〇章一 死し蠅は和香者の膏を臭くしこれを腐らす少許の愚癡は智慧と尊榮よりも重し二 智者の心はその右に愚者の心はその左に行くなり三 愚者は出て途を行にあたりてその心たらず自己の愚なることを一切の人に告ぐ四 君長たる者汝にむかひて腹たつとも汝の本處を離る勿れ温順は大なる愆を生ぜしめざるなり五 我日の下に一の患事あるを見たり是は君長たる者よりいつる過誤に似たり六 すなはち愚なる者高き位に置かれ貴き者卑き處に坐る七 我また僕たる者が馬に乗り王侯たる者が僕のごとく地の上に歩むを観たり八 坑を掘る者はみづから之におちいり石垣を毀つ者は蛇に咬れん九 石を打くだく者はそれがために傷を受け木を割る者はそれがために危難に遭ん一〇 鐵の鈍くなれるあらんにその刃を磨ざれば力を多く之にもちひざるを得ず 智慧は功を成に益あるなり一 蛇もし呪術を聽ずして咬ば呪術師は用なし二 智者の口の言語は恩徳あり 愚者の唇はその身を吞ほるばす三 愚者の口の言は始は愚なりまたその言は終は狂妄にして惡し四 愚者は言詞を衆くす 人は後に有ん事を知ず 誰かその身の後にあらんところの事を述るを得ん五 愚者の勞苦はその身を疲らす彼は愚に在ることをも知ざるなり一六 その王は童子にしてその侯伯は朝に食をなす國よ 汝は禍なるかな七 その王は貴族の子またその侯伯は醉樂むためならず力を補ふために適宜き時に食をなす國よ 汝は福なるかな一八 懶惰とこころよりして屋背は落ち手を垂るとこころよりして家屋は漏

る一九 食事をもて笑ひ喜ぶの物となし酒をもて快樂を取れり 銀子は何事にも應ずるなり二〇 汝心の中にても王たる者を詛ふなかれまた寢室にても富者を詛なかれ 天空の鳥その聲を傳へ羽翼ある者その事を布べければなり

第十一章一 汝の糧食を水の上に投げよ多くの日の後に汝ふたび之を得ん二 汝一箇の分を七また八にわかつて其は汝如何なる災害の地にあらんかを知らざればなり三 雲もし雨の充るあれば地に注ぐまた樹もし南か北に倒るるあればその樹は倒れたる處にあるべし四 風を伺ふ者は種播ことを得ず雲を望む者は刈ことを得ず五 汝は風の道の如何なるを知らずまた孕める婦の胎にて骨の如何に生長つを知らず 斯汝は萬事を爲たまふ神の作爲を知ことなし六 汝朝に種を播け夕にも手を歌るなかれ其はその實る者は此なるか彼なるか又は二者ともに美なるや汝これを知らざればなり七 夫光明は快き者なり目に日を見るは樂し八 人多くの年生ながらへてその中凡て幸福なるもなほ幽暗の日を憶ふべきなり 其はその數も多かるべければなり 凡て來らんところの事は皆空なり九 少者よ汝の少き時に快樂をなせ 汝の少き日に汝の心を悦ばしめ汝の心の道に歩み汝の目に見るところを爲せよ 但しその諸の行爲のために神汝を鞠きたまはんと知べし一〇 然ば汝の心より憂を去り 汝の身より惡き者を除け少き時と壯なる時とはとも空なればなり

第十二章一 汝の少き日に汝の造主を記えよ 即ち惡き日の來り

年としのよりて我われは早はや何なにも樂たのむところ無なしと言いにいたらざる先さき二ま  
 た日ひや光ひかり明つきや月つきや星ほしの暗くらなる先あめ雨あめののち後のちに雲くもの返かへらざる  
 中うちに汝なな然しかせよ三その日ひいたる時ときは家いえを守る者ものは慄おそひ力ちからある人ひと  
 は屈かがみ磨ひき碎なす者は寡すくなきによりて息いきみ窓まどより窺うかがふ者は目め昏くらむなり  
 四磨ひきこなす聲こゑ低ひくくなれば衢ちまたの門かどは閉とづその人ひとは鳥とりの聲こゑに起おきあが  
 り歌うたの女むすめ子はみみな身みを卑ひくくす五かかるとは花はな咲なほくまた蝗いなせもその身みに重おもそ  
 き者もの多く途みちにあり巴はたんき旦やう否やは花はな咲なほくまた蝗いなせもその身みに重おもそ  
 嗜しよく欲よくは廢すたる人ひと永とこ遠えいの家いえにいたらんとすれば哭なき婦め衢ちまたにゆきかふ六  
 然しかる時ときには銀しろの紐なほは解とけ金かねの蓋ふたは碎くだけ吊つる瓶へいは泉いづみの側そばに壞やぶれ轉くる轉くる  
 は井いの傍かたはらに破われん七而しかして塵ちりは本もとの如ごとくに土つちに販かへり靈たま魂しひはこれ  
 賦さけし神かみにかへるべし八傳でん道だう者しや云いふ空くうの空くうなるかな皆みな空くうなり九  
 また傳でん道だう者しやは智ち慧ゑあるが故ゆゑに恒とこに知し識しを民たみに教おしへたり彼かれは心こころ  
 をもちひて尋たづね究きめ許あまの多たの言ごをつつくりしる者ものは正ただ直たしくして眞ま實じつの  
 佳よ美みき言ご詞しを求もとめたりその書かきしるしたる者ものは正ただ直たしくして眞ま實じつの  
 言ご語ごなり二智ち者しやの言ご語ごは刺さ鞭むちのごとく會くわい衆じゆうの師しの釘くわちたる釘くわちの  
 ごとくにして一人ひとりの牧ぼく者しやより出いでし者ものなり三わが子こよ是これ等らより  
 訓いましめ誠まことをうけよ多おほく書しよをつくれば竟はてなし多おほく學まなべば體からだ疲つかる三  
 事ことの全ぜん體たいの販せんする所ところを聽きべし云いふく神かみを畏おそれその誠まこと命いのちを守まもれ是  
 は諸しよの人の本ほん分ぶんたり四神かみは一切すべての行わざ爲ならばに一切すべての隠かくれた  
 事ことを善よ惡あむともともに審さ判はんたまふなり